

今年度は、観念世界を深く描いた作者が多かったように思う。ここではすべてが自由だ。詩の筋力はどこまでも強くなり、羽ばたくことができる。どのような表現世界を持ち、自由に浸り遊べるかは非常に大切だ。楽しむ心こそが新たな表現を見つける力の源になるし、「帰る居場所」を持っておくのは自分のためになる。けれどそこは、作者のみで完結してしまう危うさも含んでいる。自身の世界を確認した後は、再び“この世”に戻り、“この世”の物に触れ描きたい。作者の表現世界と読者とを結ぶものを増やすことが、自身の詠み幅や視点を増やしていくと感じている。

『流れが速く物に溢れた現代において、どのように詩のヴェールをかけるか。新しいものが次々に生まれては消えていく中で、奇を衒うではなく、丁寧にスケッチすることにまた戻りつつあるのではないか、と考える。手触りという感覚をどのようにスケッチするか』奨学生についても、口語詩句賞と同じ上記の定義から選出した。

特に心に残ったのが川上 真央氏、高田皓輔氏、快名氏の三名だ。

●川上 真央

①クリームで／ふちどるように／駅までを／二人おおきく周って帰る

②からあげ棒／ほとんと合わす／聖火って燃えているかは／関係なくて

③喉仏ずんと押し込む／居眠りのひとが／祈りの角度をかする

④夏霧にさらし／泣きあとと糖衣めく

①歩く軌道がクリームの甘さ、柔らかさを持つ。「おおきく回って」に二人ならどんな時間も豊かに過ごせることが伝わってくる。②「聖火」において重要なのは繋げることだと考える作者。生涯で聖火を持つことはないだろうが、からあげ棒を合わせることで何かを繋げた感覚を得る。③「ほとん」「ずん」など擬音が独特だが、力加減が巧みで読み手によく伝わってくる。「祈りの角度」と同じであることを発見した。④泣き暮れて、泣き止んだ後の頬のつっぱる感覚。涙は塩辛いものだが、夏霧にさらすことで甘みを帯びる。体験から得たものを詩に昇華させた。

●高田皓輔

①水没のまちにひらがなだけのこる

②何回もわたしを折って／月に／届くよ

③ぼくらとは違う理由で黙る森

①生き延びたもの達だけで生きていかなくてはならない。何もかもが水に沈んだ「まち」で生き残った「ひらがな」。表記の中で最も優しく、しかし弱いひらがなは絶滅の一途を辿るのかもしれない。けれど、そこに至るまでは生き続けるしかないのだ。②紙を四十二回折れば、理論上は月まで届く。「私」を無機物と同じく扱い、淡々と折る対象として見立てるグロテスクさ。「届くよ」と語りかけるには、一度経験しているはずで、無傷ではないだろうにまた望む。③同じ行為でも、種ごとに理は違う。我々人間と「森」とで

は沈黙の理由は当然違うのだが、それは即ち起こす行動ももちろん違うということ。似た表情をしながら、突然牙を剥かれる可能性もある。

● 快名

① 凧から凧へ／何年先の泣き方で泣き尽くしても／航路だったよ

② アンダンテ／座れば咲いてしまうから

① 万策尽きた後の凧。どの泣き方をしても道が同じであると知ったとき、心だけは遠くを臨みながらももう足は動かない。後悔がないのは「泣き尽くす」ことだろうが、このあとの生きる力を、忘れる方法を、心は分らないかもしれない。② 咲いてはいけないものが芽吹いている。目を向けず、枯れさせなくてはならないことを作者は知っており、どうにか立ち止まらず進み続ける。アンダンテとは音楽用語で歩くような速さでという意味。朗らかな表現に使われるが、作品の中では意図的に何かに蓋をし、朗らかな世界を維持している危うさを感じる。

● 松下 誠一

① 花萼が散ればそういうことだから

② 口下手で梅のしたまで来てしまう

後から聞かされる決定事項の残酷さ。「〜だから」と言われると、もう覆せない気がする。根拠も本人しか納得できないような理由で、結果もどうなったのか分からない。他者へ伝えているようで、自己完結の極みである。なのに、なぜか受け入れてしまう迫力がある。② 素朴で、人の心と梅の美しさが際立つ作品。話したいのに言葉が出ず、無言で歩き続けた先に咲いていた梅の花を二人で見上げる。「来てしまう」に苦し紛れに歩き続けたことでもたまたま行き着いたのだと分かるが、同じ感動を共有することは、時に言葉を交わすより心の距離を縮めてくれる。

● ムクロジ

泣くための時間が少し要る二月

父親の介護か病気の看病をしているであろう作者。肉親が弱っていく様を間近で見続けていると何かが麻痺していつてしまう。共倒れしないための防衛なのだが、当事者にしか分からない苦悩があるのだ。家の中で完結しているからこそ追い詰められてゆく。苦しさが日常化してしまい涙も出ない日々の中にも、どうしても泣きたいときがある。けれど泣こうと意識しなければ心の動かない事実にも愕然とする。時間をかけてようやく流れた涙は、どこまで自分の心から遠ざかったものなのだろう。

● 大西 美優

裏にくるまれて金箔色のゆめ

一読して地蔵のことだろうか、と思ったが、「ゆめ」そのものを具体化したものにも読める。金色よりまろみのある金箔色に「ゆめ」が安寧の表情を浮かべているであろうことが伝わってくる。誰かによって掛けられた「蓑」に守られる姿。優しさの具体の蓑である。

●青木菓子

泣き顔を対向車線にだけ見せる

対向車線の運転手などこちらを見ていないだろうに。そんな対象を相手にしか泣き顔を見せられないのなら、誰の前でも泣けないのと同義だ。ほとんど見られていないと知っているからこそ泣ける、もしくはは一瞬だけ目に入り、自分の悲しみを見てもらえるかもしれない。そんなある種の祈りを頼りに泣きに行く。孤独な作業の中にのみ救いを感じているのだ。おそらく夜、対向車線のライトに照らされたむき出しの泣き顔こそ、この人の本質が解放された瞬間なのかもしれない。

●上原一樹

閉店の日の白菊を買ってゆく

終わりの日は、やはり何事も悲しい。長く通った八百屋でも、街を潤すスーパーでも。自分の食を支えてくれる場所は命を支えてくれる場所である。閉店となればセールがあるだろうが、そこで買い込むことはせず、白菜を一つだけ買い赤子を抱くようにかかえて自宅へ帰る。悲しさを形にしたような、ひんやりとした重みのある美しい白菜だろう。冷蔵庫に仕舞われ扉を閉めた暗がりの中で、思い出と共に眠る。

惜しくも賞は逃したが、推していた作者を挙げていく。

箭田儀一 ポタージュになればすべてが／同じ色になってしまう事の静けさ

回る卵 水かきの無い手／宇宙に戻る体温／少しずつ忘れることが／どうして必要

だったか

八尾保醒 切れてから動脈だとわかった秋

蛙多楓太 エンドロール見る人髪をとかず人

ちねんひなた ライカどくだみを見て／ライカ目をつむるようにならゆる／さいわいを

秋山颯汰朗 赤子抱く／余分なものがしみぬよう

榎本 佳歩 約束をしよう／秋のあなたになる前に